令和４年度前期・後期終始業式校長講話

うつむいて静かに考えることの意味

長野県蘇南高等学校長　　小川幸司

はじめに

今日で２学期制の前期が終わり、明日から後期が始まります。

この８月から９月にかけて、私は本校の全教員の授業を参観して、皆さんが学んでいる様子を間近で見ることができ、とても心を動かされました。例えば、３年生の古典の授業では、生徒が教師役になって、『平家物語』の古文の文法的な読み取りを対話形式で行っていました。２年生の英語の授業では、生徒会長の立候補演説と応援演説を英語で模擬スピーチして、その後の質疑応答も英語で行っていました。１年生の数学の授業では、２次関数のグラフを正確に書くために、友人同士で互いのグラフをよりよくするためのアドバイスをしあっていました。

ここで例に挙げた授業以外にも、多くの授業で、タブレットを効果的に使いながら相互に対話をしながら学んでいる姿を見せてもらいました。

学ぶときに大切なキーワードは「対話」と「熟考」です。先生が教えたことをただ丸暗記してテストで再生すればよしとするのではなく、自分で納得できるように考えて、自分自身の意見を表明できることが大切だからです。知識をつめこむだけではなく、自分の頭と心で考えて、自分なりの考え方をもつことです。そのためには自分一人がいればよいのではなく、先生と自分だけでもなく、対話をし合う友人の存在が欠かせません。全日制の高校で友人と一緒に学ぶことの深い意味がそこにはあるのです。

ただし、人と一緒に生きていくということは楽しいことばかりではありません。自分には本来的に「自由に生きたい」という願いがあります。そしてお互いの「自由」が衝突し合うこともしばしば起こるからです。

「自由」と「共生」は、どのようにしたら、両立していけるのか。このことを考えてみましょう。

１　「自由」と「共生」を両立させることの難しさ

今週、銃撃されて亡くなられた安倍晋三元首相の国葬が行われました。18 憶円近い国のお金を国葬に使うことを国会で議決せず、内閣の判断だけで実施することに批判が寄せられました。一方、岸田首相や自由民主党の政治家の皆さんは、長きにわたって日本のかじ取りをした安倍元首相の死を特別に悼むのは当然だと考えました。そこでは日本国民としての「共生」が特に強調されて、国民がこの問題について抱いた意見を政治に反映させる「自由」があまり重視されなかったところに、対立の原因があると言えましょう。

一方、安倍首相を銃撃した Y 容疑者は、母親が旧統一教会（現・世界平和統一家庭連合）に莫大な献金をしてしまい、自分の進学もできなくなったことを深く悲しみ、そして恨み、犯行に至ったことが報道されています。私が大学生だった頃、統一教会は多くの若者たちを信者に獲得していました。信者が「このままでは地獄に落ちる」と言わ

れて恐ろしくなって多額の献金（何百万、何千万という単位）をしてしまうとか、会ったこともないのに教祖の指定した相手と合同結婚式で夫婦関係になって、これまでの家族と絶縁状態になってしまう、あるいは、新たな夫婦間の不和で苦しむといった問題がクローズアップされていました。統一教会からすれば、信者は自分の「自由」な意思において献金し、合同結婚式に臨んだのだから、全く問題はないということになります。しかしそのことは、信者が反対する親との縁を切ったり、あるいはＹさんのように親の献金によって２世が貧困に苦しんだりして、信者の「自由」のために他の人々との「共生」が犠牲になってしまうという問題が生じています。

では、「自由」と「共生」が両立するために必要なことは、何でしょうか。

２　ジェンダーを事例に「自由」と「共生」を考える

第一に、お互いの「自由」を認め合うことで、「共生」が実現するということが言えると思います。

たとえば、LGBT と呼ばれる性的マイノリティの人々のことを考えてみましょう。人間という生物には男と女があるという私たちの通念に対して、現代科学の知見からは、性が明瞭に二分されるものではなく、「グラデーションがかっている」ことが明らかになってきました。例えば、女は性染色体が XX であるのに対して、男は XY だと言われていますが、実際にはもっと多様な性のかたちがあるのです。

（表）生物学的な性別の多様性

医学的症例としての「正常／異常」		生物学的特徴・表現型・特徴／傾向			
性腺	正常	女性外性器＋卵巣（女性）／男性外性器＋精巣（男性）			
	異常	女性仮性半陰陽	男性外性器＋卵巣	性分化疾患	
		男性仮性半陰陽	女性外性器＋精巣		
		真性半陰陽	卵巣＋精巣		
性染色体	正常	46染色体・性染色体XX（女性）／性染色体XY（男性）			
	異常	クラインフェルター症候群	47染色体・XXY	男性	無精子症
		ターナー症候群	45染色体・X	女性	低身長
		XX男性	46染色体・XX	男性	
		睾丸性女性化症候群	46染色体・XY	女性	原発性無月経

（出典：三成美保ほか『ジェンダー法学入門・第３版』）

また、身体の性とは別に、自分がどのような性関係を望むのか（性指向）とか、自分自身をどのような性だと自覚するのか（性自認）が、とても複雑に何通りもあることが、わかってきました。例えば、男の身体をもち、自分自身をどちらかといえば女と認識し、好きになるのは男も女もどちらの場合もある･･･といった人がいても、何の不思議でもないということになります。実際、人類の歴史は、古代ギリシアの男たちが妻を持ちながら同時に男たちと肉体関係を結ぶことが、ごく自然に行われたように、性のあり方はとても多様でした。

それが、近代の欧米社会に学校ができ、男が会社で働き（時には軍隊で戦い）、女が家庭で子育てをするようになると、「男は男らしく、女は女らしく」ということが当たり前であり、そこから外れる生き方は異常なことだと見られるようになります。LGBT の皆さんが自分らしく生きられない、つまり「自由」に生きて、人々と「共生」できな

い社会になってしまったのです。
　生物的な男女とは別の「男らしさ、女らしさ」のような文化的な性差をジェンダーと言います。蘇南高校が、本当の意味でジェンダー平等になっているのか、皆さんも、よく考えてみてください。身体は男であるけれども自分は女だと認識している生徒は、トイレや更衣室をどうするのでしょうか。皆さんの中に困っている人がいれば、遠慮なく担任の先生に相談してください。現代の大学では、誰もが個室のように使用できる「オールジェンダー・トイレ」、「オールジェンダー・更衣室」を設置しているところも増えてきました。
　では、校則はどうでしょうか。日本社会には、男・女関係なく同じ服装にすべきだという意見があります。でも全員が同じ服の形になったら、今度は逆に「男子らしい・女子らしい」服装を望む人が悲しい思いをするでしょう。だからこのような場合、同じにするというより、選択できる幅を広げていくことが、一つの方法でしょう。
　大切なことは、お互いの「自由」を認めて「共生」を目指していくのです。

３　シモーヌ・ヴェイユの哲学から「自由」と「共生」を考える

　「自由」を広げるだけでは、「共生」にならない場合もあります。
　たとえば、校則の身だしなみ規定について考えてみましょう。そもそも服について何を着てもいいのではないか。髪の色、装身具など制限をなくすべきではないのかという主張があります。これについて日本の高校のなかにはグラデーションがあることも皆さんは知っているはずです。

①完全に制限がない高校もあります。卒業生全員が進学する高校とか通信制に多いことがわかるでしょう。
②あるいは、服は自由だけれども、髪の色や装身具を制限している高校もあります。
③本校は制服を定め、髪の色や装身具を制限しています。全国的には最も多いパターンです。
④他県に行くと髪型や下着の色まで詳細に制限されている高校が結構あり、それが「ブラック校則」として社会問題になっています。

　ここで注意してほしいのは、身だしなみの校則が存在することは、最高裁判所も違法ではないと認めているという点です。現代社会では、ゆきすぎた制限が問題になっているのです。そもそも校則とは何のためにあるのでしょうか。先生が生徒を管理しやすいようにするためだと思っている人がいるかもしれませんが、それが究極の目標ではありません。
　校則は、「共生」のためにあるのです。現在の日本社会は、全員の大人たちが身だしなみは自由で構わないと考えているわけではありません。駅から学校に向かう多くの生徒が金髪だったり、思い切りラフな服装だったりしたときに、「この高校の生徒を採用するのはやめよう」「この高校を応援したくないな」と思う大人も現れます。そのとき誰かの自由によって、別の誰かの就職することや学びに応援をいただくことが、できなくなっていくわけです。誰かの自由が、別の誰かの自由を奪ってしまうということが起こります。
　だから校則とは、ここに集ったみんなの「共生」のために、どのように「自由」を作っていくかを考えるルールなのです。

今から約 80 年前のヨーロッパで「自由」について考えた哲学者に、わずか 33 歳で亡くなったシモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil，1909～43）という女性がいます。ヒトラーに抵抗して「自由」をいかに守るかを考えた人です。『自由と社会的抑圧』の中で、彼女は次のような意味の自由論を述べています。

――欲望のままにしたいことをするのが自由ではない。自分がかかげる目標に向かっていくつもの手段をもって、しっかり考えながら生きることが、「自由」に生きることなのだ。――

つまり、ヴェイユの考え方を参考にするならば、「共生」をしっかり考えながら自分の生きる道（目標と手段）を選んでいくときに「自由」がうまれるのです。

この学校に集う生徒の皆さんが、お互いに幸せになることを目標にして努力していくときに、「自由」と「共生」がともに実現していくのだと言えましょう。その観点から校則とはどうあるべきかを考える必要があります。

統一教会の問題に戻れば、自分の魂が救われるという目標をかかげたときに、献金とか合同結婚だけでなく、教団から脱退することも含めて、様々な選択肢を自分の頭でじっくり考えることができたとき、自分は「自由」だと本当の意味で言えるのだと思われます。

おわりに――彫刻「律」の姿へ

今日は、「自由」とは欲することができれば実現するのではないということを考えました。自分の目指す目標と、そのための手段をじっくり考えて、自分と人々がともに幸せになるように努力するとき、そのときにこそ「自由」が実現するのです。

英語では、「考える」という意味の動詞に think を使うのに対し、「じっくり考える＝熟考する」という意味の動詞には consider を使います。ラテン語の「一緒に」を意味する con と星を意味する sidus が結びついた言葉です。夜空に浮かぶ星座をいくつも眺めながら、今の自分は、どの季節のどの位置にいるかをじっくり考える。広い宇宙を見渡して自分のことをじっくり考えるのが、consider です。

蘇南高校の前庭には、彫刻家の勝野眞言さんの日本彫刻会展で日彫賞を受賞した作品「律」が置かれています。勝野さんは、本校の先輩で、世界的に活躍しておられる芸術家です。この像の女性は、はつらつと空を見上げているわけではありません。目を閉じ、うつむき、静かにじっと考えています。夜空を見渡したあとで、瞼を閉じて自分の生き方を conseder している姿なのだと、私はこの彫刻を観ています。本当の「自由」とは、この彫刻の女性のような姿をしているのではないでしょうか。

後期の学びを進める皆さんが、人々と自分の幸せを consider して、「自由」を実現していくことを、私は心から応援しています。

【参考文献】

シモーヌ・ヴェイユ、冨原眞弓訳『自由と社会的抑圧』（岩波文庫、2005 年）
三成美保ほか『ジェンダー法学入門・第３版』（法律文化社、2011 年）